

# 埋文

## とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2023.3.31

VOL.

162



小竹貝塚出土品(富山市呉羽)  
《管玉(上)、牙玉(中)、垂飾(下)》

14号人骨(成人男性)の副葬品です。管玉はゴカイ類の棲管<sup>せいかん</sup>を、牙玉はオオカミの牙を、垂飾は鹿角を素材としたもので、これらはセットで首飾りにしていたようです。棲管の出土はこれ1点のみであることから、持ち主(14号人骨)は小竹ムラの外からやってきた「旅の人」なのかもしれません。

とっておき埋文講座 ● 県営・国営農地整備事業の試掘調査

● 富山県の後期旧石器時代の年代：日本列島への現生人類の出現と拡散を考える

Center Flash ● 催しガイド2023

古写真発掘！ ● 直坂Ⅱ遺跡 富山市直坂

富山県埋蔵文化財センター

# 県営・国営農地整備事業の試掘調査

とっておき埋文講座①

## はじめに

富山県では、農業・農村の将来にわたっての発展を目指して「農地整備事業(ほ場整備)」が進められています。なかでも、富山市水橋地区周辺では、水田の大区画化や排水不良の解消などの基盤整備や地域の活性化を図るために県営事業と並行して国営事業が推進されています。

こうした、ほ場整備の工事に先立ち、県教育委員会では水田の下に眠っている遺跡の状況を確認する試掘調査を行い、遺跡の広がりや状態を把握し、遺跡が工事で破壊されることのないよう調整を行っています。

今年度は宮条南遺跡①、針原中町中性遺跡②、浜黒崎町畑遺跡③、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡④、金尾遺跡⑤、石仏嶋町遺跡⑥、大永田西遺跡⑦の7遺跡で、合計277ヶ所のトレンチ(試掘坑)を設定し、試掘調査を行いました。(番号は地図中の番号)

水橋地区は明治時代にヨハネス・デ・レーケによる常願寺川の改修がなされるまで、度々洪水の被害を受けた地域ですが、縄文時代～近世にかけての多



試掘調査でのトレンチ掘削



調査をした遺跡の位置 ( ● 県営 ● 国営 )

くの遺跡の存在が知られた地域でもあります。今回調査をした遺跡のうち、2つの遺跡について紹介します。

## 弥生時代の土器がザクザク 宮条南遺跡

富山市町袋地内に所在し、常願寺川左岸の水田地帯に広がる遺跡です。調査は昨年に引き続き2年目で、今回の調査対象地は遺跡の北東部分にあたります。

トレンチ46ヶ所を設定し、微高地上に穴、溝などを確認しました。なかでも遺跡中央付近の2ヶ所のトレンチで確認した穴・溝からは、弥生時代中期の弥生土器や磨製石斧がまとめて出土しました。直径1.5m程の穴から直線文や波状文、扇形文などの櫛描文で飾った壺や、大きく開いた口縁部の内側に斜めの短い直線を連続させ

た甕などの土器が重なるように出土しました。



穴を確認しました



掘り下げると、土器がザクザク!



出土した弥生土器



遺跡周辺では針原中町I遺跡、浜黒崎悪地遺跡、浜黒崎野田・平榎遺跡などでも弥生時代の遺構・遺物が確認されています。これらの遺跡は常願寺川の氾濫によって形成された自然堤防などの微高地上に位置しています。宮条南遺跡もこうした微高地上に位置する弥生時代の遺跡のひとつであることがわかりました。

## 古代のむらの姿 大永田西遺跡

上市町大永田地内、北陸自動車道の上市スマートインターチェンジの北東側に位置する遺跡で、遺跡東側を富山地方鉄道が南北に走っています。調査対象地は東の上市川にむかい緩やかに傾斜しており、西側が一段高くなっています。

トレンチ89ヶ所を設定し、西側の12ヶ所のトレンチでは古代の柱穴・穴・井戸・溝を確認しました。北端のトレンチでは溝の東岸から土師器の椀が並んで出土しました。底部に糸切り痕がある小ぶりなものや、赤く塗られたものなどがあります。近くのトレンチでは建物の柱穴と考えられる柱の残る穴がみつかりました。調査対象地北西部分で、これらの遺構がまとまってみつかり、古代の村の中心は今回調査した範囲の西側に広がるのではないかと考えています。

また、西側の微高地上では古代の遺物包含層を切り裂く噴砂が9ヶ所で確認できました。噴砂は強い地震のゆれが起こす液状化により地下の砂や水が地上に吹き上がる現象のことです。富山県は地震被害が少ない県ですが、遺跡が位置する県東部では、安政5(1858)

年飛越地震で甚大な被害を受けています。今回みつかった噴砂は、この安政の飛越地震によるものかもしれません。

## おわりに

試掘調査は遺跡全体の数%と限られた部分を掘るため、そこから遺跡の

全容を知ることは難しいことです。ただ、わずかな遺物や遺構でも、積み重ねることによってその地域の歴史をひもとく貴重な資料となります。今後もこうした小さな歴史をコツコツ集め、埋蔵文化財の保護のために蓄えていきたいと思えます。

(金三津道子)



土師器の出土状況



柱穴の断面



土師器の出土状況



噴砂の確認状況



出土した土師器

# 富山県の後期旧石器時代の年代： 日本列島への現生人類の出現と拡散を考える

とっておき埋文講座②

東京都立大学人文社会学部准教授 出穂 雅実

## はじめに

富山県で初めて、後期旧石器時代遺跡の占拠年代を明らかにしました。直坂Ⅱ遺跡から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施し、第1・9ユニットの年代がおおよそ33,000年前であることが分かりました。

2019年7月に富山県埋蔵文化財センターで県下の後期旧石器時代遺跡出土資料を見学した際、直坂Ⅱ遺跡の出土遺物が収納されているコンテナの中に、小さなポリ袋4袋分の炭化物が保管されていることを知りました。袋にはサンプル採取年月日・位置・層位の記述のある豆荷札が付いていて、炭化物は縄文時代と後期旧石器時代の地層から採取されたことがわかりました。炭化物の年代測定は東京大学の共同研究者が実施することにしました。炭化物や遺物の出土状況に関するデータの収集および出土石器の分析は私が東北大学の共同研究者らと分担しました。それぞれの研究を総合化し、論文を2022年の1月にまとめました。その成果が2022年6月に『旧石器研究』に掲載されました。



赤矢印が直坂Ⅱ遺跡、黄矢印が直坂Ⅰ遺跡  
左端が神通川（東から。1975年調査時撮影）

## 直坂Ⅱ遺跡について

直坂Ⅱ遺跡は、1972(昭和47)年に富山考古学会会員の亀田氏により発見されました。この年は、後に国の史跡とな

る、隣接する直坂Ⅰ遺跡(直坂遺跡)が調査されていました。直坂Ⅱ遺跡は、1975(昭和50)年に2ヶ月間にわたり、ほ場整備に伴う発掘調査が行われました。直坂Ⅰ遺跡は石器が多数出土し、その後もたくさんの研究者によって繰り返し検討されたのですが、直坂Ⅱ遺跡の研究は、あまりなされてきませんでした。

遺跡は海拔170mの直坂面と呼ばれる河岸段丘上にあります。周辺の段丘面は、それより一段低い大沢野面、そして現在の神通川に沿う下位面群の3つに区分されます。この直坂面の下部礫層の上位に6万年前に噴火した火山灰「大山倉吉テフラ」があります。一方、一段低い大沢野面には、3万年前に噴火した火山灰「始良Tnテフラ」が見つかっています。このことから直坂Ⅱ遺跡がつけられた時代は、大山倉吉テフラの堆積後しばらくして、かつ始良Tnテフラが降下する直前となります。大沢野面に神通川が流れていて、直坂面が神通川を望む段丘になった頃に、直坂Ⅱ遺跡の後期旧石器時代の占拠跡が残されたことがわかりました。

直坂Ⅱ遺跡は、地層の厚さが3.8mもありました。他県でもこれほど条件の良い例は珍しく、富山県下では最も地層が厚い後期旧石器時代の遺跡です。その地層が、I～XI層の11に区分され、5～9枚の文化層が見つかりました。発掘調査の概報には各層についての説明はなかったのですが、埋文センターに保管されている発掘調査時の現場図面には、一層一層の地層がどういう地層だったのか詳しく書き込まれていました。

概報には直坂Ⅰ遺跡と東京都野川遺跡の地層の柱状図が示され、それぞれの遺跡からどのような“顔つき”の石器が見つかるのかという対比表を作って説明されています。概報にも関わらずこの図が出たことで、富山県には様々なタイプの後期旧石器時代の石器群が存在する、そしてそれらはかなり長期にわたって変化しているということがわかりました。今回特に研究対象としたのは、後期旧石器時代前半期の、第Ⅳ下層上半から出土した第1・9ユニットの「メノウ製小型石器」グループと、第Ⅳ下層下部から第Ⅴ層の第4ユニットから見つかった「石刃・ナイフ形石器・礫器」グループの二つの石器群です。

## 炭化物の年代

4つの袋に入った炭化物は全て木炭で、3つの異なる地層と場所からサンプルリングされていました。一つ目が第Ⅰb層に作られた縄文時代の土坑、二つ目が今回の研究の主な対象の第Ⅳ下層第9ユニットの台形様石器群、三つ目が、第Ⅴ層第4ユニットの最古の石器群だと概報で評価された、石刃・ナイフ形石器(※現在は二側縁加工尖頭形石器と呼ぶ)・礫器の石器群からだとわかりました。この3つを測れば縄文時代、第9ユニットの台形様石器群の年代、第4ユニットの石器群の年代が出ると予想し、合計10点のサンプルを採取しました。

今回の炭化物サンプルは非常に保存状態が良く、十分な量の炭素を得ることができましたので、測定自体はかなり信頼がおける結果と言うことができま



コンテナの中にあつた炭化物



す。台形様石器群は、年代が3万年前頃と想像していた石器群ですけども、合計6点測り、33,400～32,200年前という年代値が出てきました。後期旧石器時代の遺跡としては、かなり年代値がまとまっています。縄文時代の試料は、3,230～3,070年前の年代値が出ました。予想と矛盾しない結果です。一方で、第4ユニットの「最古」と考えられていた石器群については、3点の年代値が5,300～4,970年前でした。

このように、2つのグループの年代は層位・予想年代と矛盾が認められないものの、「最古」の石器群から得られた年代値は、層位・予想年代との間に矛盾が認められました。そこで、概報の記述を徹底的に批判的に読み込みました。また、埋文センターには、調査当時に現地で記録された図面が全て保管されており、それを一点一点つぶさに読み込みました。発掘調査時の写真も35mmフィルムでネガとポジの両方が保管されて

いて、これもルーペを使い、一枚一枚、全部確認しました。

第9ユニットは石器の出土地点を図面に記録されており、石器と現場図面番号を照合することが出来ました。大体20～30cm位の厚みの中で遺物が出土したことがわかりました。また、大きな攪乱は起きてないと考えられ、データと記述と年代値に齟齬は認められないことから、この33,000年前頃の年代というの、人間行動に伴う年代値として理解できると結論付けました。

そのうえで、石器が多数出土した直坂Ⅰ遺跡とは異なり、直坂Ⅱ遺跡の第1・9ユニットではわずか110点の遺物しか出土していないことを、逆に私たちは積極的に評価しました。遺物の点数が少ないというのは、実は人間行動を復元する際の重要な指標になります。一般に、人間が一箇所で長く暮らすとさまざまな行動をするので、土地に残される遺物の量は多くなり、また道具の種類は増えることが予想されます。第1・9ユニットの石器の器種は、小型の剥片と、若干の二次加工か使用時の刃こぼれがある剥片しか出土せず、「器種多様度が低い」のです。これらのことから、この遺跡は、後期旧石器時代には長く暮らした場所ではなく、単発的で短期的な作業をしてどこかへ行ってしまった遺跡なのだと推定しました。

ていて、地層の状況が異なります。第4ユニットの地層セクション図をよく見ると、第Ⅴ層や第Ⅳ層が、新しい時代の地層によって、かなり乱されていることがわかりました。上の地層の炭化物が下の地層に、木の根の跡などを通して下方に落ちてしまった可能性を確認することができました。さらに、出土した1点のナイフ形石器は、直坂Ⅰ遺跡の石器と類似することから最古段階として当時考えられたのですが、現在の研究の視点から言うと、より新しい時代のナイフ形石器（二側縁加工尖頭形石器）と区分できます。

地層の攪乱が生じたのかどうか、またその理由についてしっかりと研究しなければ、遺跡の年代を間違えて理解してしまうかもしれません。特に後期旧石器時代のように、1～3万年前という古い時代の遺跡では、様々な原因が重なって遺跡の攪乱や混合が起きてしまうことがあるので、年代を決める際には注意が必要です。後期旧石器時代遺跡の年代決定は難しいことが多いのですが、その中でも非常に上手くいった例というのが、第1・9ユニットの年代決定だというふうに考えてもらえればと思います。

## 世界の旧石器時代研究の意義

直坂Ⅱ遺跡は、現生人類（ホモ・サピエンス・サピエンス）が残した遺跡です。現生人類は、20万年前にアフリカのどこかで生まれたと考えられています。現在、人類化石証拠、DNA証拠、我々考古学者が扱う文化証拠、古生態証拠、古気候・景観証拠を用いて、様々な分野の研究者が総合的に研究を行っています。私はシベリアやモンゴルなど東ユーラシア北部をフィールドにしている、今回直坂Ⅱ遺跡で実施したような、遺跡の年代決定を数多く実施してきました。確実な証拠に基づくと、現生人類は、大体5～4万年前に、ユーラシア大陸のかなり広い範囲に広がったことがわかっています。

4万年前頃にはユーラシア大陸の各地に現生人類が広がっていくのですが、その後は地域の環境に合わせて生活の仕方を変えたり、狩猟の方法を変えて、地域化が進んでいくという流



第1・9ユニットの石器

## 第4ユニットの年代問題

第4ユニットの「最古」の石器群をどう考えればいいのか。このユニットでは、遺物が大体4×3mの範囲の、比較的狭い範囲で見つかっています。礫群があるので遺物の出土点数は多いのですが、礫以外の石器は10点以下と少ないです。概報には、第4ユニットは上下2層に跨がって確認され、上層からは礫群を含む多数の遺物が出土し、下層は、第9ユニットとほぼ同じ地層の第Ⅴ層上半から、ナイフ形石器1点と礫器1点が出土したと説明されています。直坂Ⅱ遺跡最古の文化層の実態は2点の石器だったのです。本当に2点の石器で最古の居住の痕跡と断言していいのでしょうか、確認が必要なのがありました。この第4ユニットは、地層が安定している第1・9ユニットから40m位離れ

れが分かっています。現在、世界中には様々な文化、地域色、歴史的な背景を持った人が住んでいます。旧石器時代の研究が今日のように進展する前は、こういった世界の多様性というのは、歴史時代にできただろうと漠然と考えられていました。しかし研究が進むにつれて、実はもう後期旧石器時代、現世人類がユーラシア大陸に一気に広がった後、すぐに世界各地の自然環境に合わせて文化の多様化が進んだという事が分かってきました。現在の多様性に旧石器時代の地域性みたいなものが具体的にどのくらい影響しているのか、旧石器時代の総合的な研究が進んでいます。各地の人間と自然の相互作用システムを正確に復元していくのが、今最も重要な研究課題、研究の方向性だと言えます。日本の個別事例研究を突き詰めることで、世界の研究にとっても重要な役割を果たすことができます。

日本では、後期旧石器時代前半期の遺跡は、およそ500箇所、北は北海道から琉球列島まで、広く見つかっています。日本列島は先ほど言った4万年前よりやや遅れて38,000年前位に現生人類が出現していると考えられます。

500箇所も遺跡が見つかるのですが、これは世界的に類を見ない遺跡数、発見数です。これも、日本の隅々に埋蔵文化財保護行政システムが根付いて、そのデータが利用できるという、日本の研究の非常に大きな強みだと考えることができます。

## 後期旧石器時代前半期の日本列島

当時の日本列島は、大きく3つに分かれます。北海道は、サハリンを経由して大陸と地続きになった半島で、古サハリン北海道千島半島と呼びます。本州は、四国、九州が接続して古本州島を作っていました。琉球列島は、台湾や九州と接続することはありませんでしたが、島々がより大きくなっており、古琉球諸島と呼びます。古サハリン北海道千島半島の当時の環境は亜寒帯の疎林と草原で、現在のサハリン北部の気候に類似します。古本州島も現在に比べると寒く、地域差はありますが、現在の東北地方とか、あるいは富山県や長野県の標高の高い地域で認められる、

針葉樹と広葉樹が混じる森林景観(汎針  
広混交林)が、平野も含めて広い範囲に広がっていました。古琉球列島には、暖温帯の照葉樹林や針葉樹林があったと考えられています。当時の日本列島は、北は冷温帯から南は亜熱帯にかけて、南北に様々な生態系があって、それが数珠つなぎになっていることを、一番重要な特徴として指摘できます。

## 日本列島への現生人類の出現と定着

現生人類が38,000年前頃には日本列島に現れます。渡来ルートは、琉球列島経由、朝鮮半島経由、古サハリン北海道千島半島経由の3つが考えられるのですけれども、これまでの年代決定の研究が進化したこともあり、琉球列島と朝鮮半島経由の方が若干古く、北海道はやや新しいということがわかりました。琉球列島経由と朝鮮半島経由のどちらが古いのか新しいのか、まだはっきりとはわからないのですが、今のところ38,000年前の年代の遺跡は、九州と本州で見つかっているの、朝鮮半島経由がやや古いと考えられます。

先に述べたとおり、4~3万年前の気候は、その後2万年前に来る最も寒い時代(最終氷期最寒冷期)に比べると、比較的温暖だったと考えられています。しかし、気候が安定していたわけではなく、ダンスガード・オシュガーサイクルとかハインリッヒ・イベントと呼ばれる、数十年、数百年、数千年周期で、気候が急激に寒暖を繰り返す、不安定な時代でした。38,000年前に日本列島にやってきた現生人類は、このような環境の森林の中で、台形様石器を使った槍を作り、狩猟をして暮らしていたことがわかってきました。

なぜ現生人類は日本列島に出現したのか。年代はだいぶはっきりしてきましたが、その理由は、まだ全然わかりません。その後、現生人類は日本列島の異なる環境に広がっていきます。いったいどのように適応したのか、こういったことも、今後の研究の課題です。

## 今後の研究の課題

当時は、北海道から琉球列島まで、6

単位程度の環境の異なる植生が分布していました。富山については、まだあまりデータがないのですが、周辺の地域のデータも含めて言うと、山地の方には落葉広葉樹を伴う常緑針葉樹林が鬱蒼として、平野の方には温帯の針葉樹と落葉の広葉樹が混交するような林があったと想像できます。二つの生態系が重なる、エコトーンと呼ばれる豊かな生態系が存在した可能性があります。日本列島全体では、北海道から東北にエコトーンが一つあります。南九州の鹿児島とか種子島の辺りにもう一つエコトーンがあります。さらにもう1つのエコトーンは、ちょうどこの中部日本とか、富山のあたりなのです。これらのエコトーンに分布する遺跡を比較してゆくことで、なぜ現生人類が38,000年前以降の日本列島に速やかに拡散したのかを解く手がかりを得られると期待しています。富山県では後期旧石器時代の遺跡が165箇所確認されています。その165箇所の遺跡で確認された石器群は、他の地域と比べても、とても多様性が高いという特徴があります。地層が薄くて、正確な遺跡の年代決定がこれまでなかなかできなかったのですが、そのような遺跡も含めて、自然環境と人間がどう関わり合ってきたかということを考えることで、日本列島の現生人類の出現と展開という大きな研究を牽引する、非常に重要な役割を果たすだろうと考えています。直坂II遺跡の年代は、33,000年前と決定しました。このような基礎的な研究を富山県で着実に積み重ねることで、今後の日本の、そして世界の旧石器研究に重要な発信をしていくことができるものと高く期待しています。今後も富山の後期旧石器時代の研究を続けさせてもらいたいと思っています。

この研究を進めるにあたり、富山県埋文センターの職員の皆様にも、たくさんのご協力をいただきました。最後にお礼を述べて、私の発表を終えたいと思います。

(令和4年11月20日

第4回 県民考古学講座)

※第9ユニットの写真を「古写真発掘!」のコーナーに掲載しています。

## 展示室

企画展

### 「見て、知って! とやまヒストリー2023」 令和5年4月14日(金)～9月24日(日)

富山県の旧石器時代から近現代までの通史について、県内各地で発掘調査された出土品を通して分かりやすく紹介します。

展示を見て楽しく歴史を学びましょう。社会科の学習にもご活用ください。



接合資料【直坂I遺跡】

特別展

### 「富山の古墳時代(仮)」 令和5年10月6日(金)～令和6年1月25日(木)

富山県内の古墳から出土した資料を中心に、古墳時代の富山に生きた人々の暮らしや祈りについて紹介します。

古墳埋葬品【板屋谷内古墳】



ミニ企画

### 「市町村連携発掘速報展」<sup>むしほしえ</sup>「春の虫干会 -重要文化財の風通し-」 令和6年2月3日(土)～4月4日(木)

県内で近年実施した発掘調査の出土品や研究成果を展示します。

また、当センターが所蔵する国重要文化財「境A遺跡出土品」や登録有形文化財などの定期点検を兼ねて、風通しの様子を公開します。



縄文土器【境A遺跡】

## 収蔵展示室

常設展示

### 「小竹貝塚展」

日本海側最大級の貝塚であり、91体の埋葬人骨が出土した小竹貝塚の出土品を展示しています。併せて、平成30年度から開始した「小竹貝塚調査研究プロジェクト」の最新成果を展示し、より興味をもっていただきます。



骨角器(小竹貝塚)

## 富山ヒストリーチャレンジアップ事業

### ■ 県民考古学講座

考古学の入門編から近年の発掘調査成果まで、当センター職員を中心に著名な講師を迎え、分かりやすく解説する講座です。令和5年度は、7月より全6回の開催を予定しています。

### ■ 出前授業・出前埋文センター

学校や地域の施設に本物の出土品を持参して、地域の遺跡や歴史について解説したり、火起しやまが玉づくりの活動を体験したりします。詳細は、お問い合わせください。

### ■ 体験教室の開催

おとなも体験できる考古学体験教室を開催します。

- ・開催日 年12回程度
- ・定員 各回20名程度
- ・対象 小学生～成人

※詳細は、HP等でお知らせします。

### ■ ワクワク体験教室

親子で楽しく学ぶ考古学教室です。まが玉づくりや刀鍛冶の体験などの古代体験を通して、先人の知恵や技を習得します。

- ・開催日 7月下旬～8月下旬
- ・対象 小学校4～6年生とその保護者

### ■ こども考古学講座

小学生を対象とした考古学講座です。

- ・開催日 夏休み期間中(3回開催)
- ・対象 小学校4～6年生

※ワクワク体験教室、こども考古学講座の詳細は、6月に小学校に配布するチラシでお知らせします。

### ■ 考古学少年団

ちょっと専門的に、富山の遺跡・出土品や歴史を、考古学の専門家の指導で学ぶ講座です。

- ・開催日 年12回程度
- ・対象 小学校6年生～中学校3年生

※詳細は、チラシやHPでお知らせします。



# 古写真発掘!—《16》



## 編集後記

いつまでも寒い日が続いていると思っているうちに、確実に花の蕾もふくらみ、春の準備が進んでいっています。当センターでも4月からの企画展の準備を進めております。ぜひご来館ください。(担当 善徳)

## 富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.162

令和5年3月31日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814  
URL <https://www.pref.toyama.jp/3041/miryokukankou/bunka/bunkazai/maibun/index.html>

## すぐさかに 直坂Ⅱ遺跡

昭和50年(1975年)撮影

富山市直坂

直坂Ⅱ遺跡は、かつての大沢野町の神通川右岸の最高位段丘上、標高約170mのところにあります。

昭和50(1975)年にほ場整備事業に伴って発掘調査が行われました。

今号のとおき埋文講座②の出穂雅実先生のお話にもあるとおり、長年の間、当センターの収蔵庫で眠っていた炭化物の年代測定により、第1・9ユニットの年代がおよそ33,000年前であることがわかりました。

上の写真は、第1・9ユニットが見つかった調査区の全景(南西から)です。下の写真は第9ユニット(北東から)です。

発掘調査から約50年の歳月を経て収蔵庫から「発掘」され、分析された33,000年前の炭化物。研究が進めば収蔵品からも色々なことがわかります。当センターでは、これからも貴重な出土品を大切に保管し、研究成果とともに公開していきたいと思えます。

